

小学校教員養成課程における家庭科の 指導方法・学習内容についての一考察

宇津野 花 陽¹

1 はじめに

大学生に、家庭科のイメージについてたずねると、「調理実習」や「被服製作実習」のような“実習”のイメージが多くあげられる。それら学生たちの記憶に残る実習のうち、「調理実習」は「おもしろかった」「楽しかった」というポジティブな評価をされることが多い一方、被服製作実習は、「楽しかった」と評価される場合もあるが、「つまらなかった」「嫌だった」というネガティブな評価をされることも多い¹。

本学でも、学生に家庭科のイメージをたずねる際、例年、先行研究と同様の傾向が感じられた。そして、被服製作実習について「つまらなかった」「嫌だった」理由をたずねると、「不器用なので」「細かい作業が苦手」「時間内に終わらなかった」「イメージどおりの作品にならなかった」など、被服製作実習に苦手意識を持つ学生が多かった。

現代において、家庭で裁縫をする機会は減っており、子どもたちの生活経験(ものづくりの経験)も少なくなっている²中で、以前は生活の中で当たり前に身につけていた技能が、小・中・高校生、そして教員を目指す大学生にとっても、十分に習得・定着させることの難しいものになっている³。

¹白鷗大学教育学部

家庭科の長い歴史の中で、戦前においてはその前身科目の一つである「裁縫」が女子教育に占める割合が高く、戦後においても、既製服化が進む高度経済成長期より以前には「つくる」こと、つまり被服製作実習が被服教育の中で占める割合が高かった⁴。現代日本の家庭生活において布を用いたものを製作する機会は減少したものの、現行の学習指導要領でも、例えば、小学校学習指導要領⁵では「C 快適な衣服と住まい」の中にその学習は位置づけられている。現代社会においても、ものを「作れる手」を持つことが具体的なものを自分で実現できる自身や自己肯定感につながり、自己肯定感を高めるともいわれている⁶。

ところが、小学校教員養成課程のカリキュラムでは、全ての教科を幅広く学ぶ必要があることから、家庭科に関する科目の数は限られている⁷。また、「被服製作実習」は家庭科の学習内容の一部（現行学習指導要領の4つの単元：A 家庭生活と家族 B 日常の食事と調理の基礎 C 快適な衣服と住まい D 身近な消費生活と環境⁸のうち、「C 快適な衣服と住まい」の単元の一部）である。したがって、小学校教員養成課程のカリキュラムにおいて、被服製作実習を学ぶ機会は限られており、その中で苦手を克服し、技能を確認し、自信をもって楽しく教えることができるようになるための学習内容や指導方法を検討することは重要な課題である。しかし、被服製作実習の意義⁹、教員養成課程における被服製作実習のカリキュラム上の位置づけ¹⁰、大学生の意識や技能の実態等¹¹についての研究蓄積が多い一方、大学生に指導する際の題材や指導方法については、実際には各大学で様々な工夫されていると思われるが、管見の限りあまり記録されていないように思われる。高森他（1988年）、永田他（2015年）、永田他（2016年）などの検討¹²があるものの、大学によってカリキュラム、被服製作実習を学習できる時間数や施設設備、学生数、学生の技能の実態等が少しずつ異なることもふまえ、より多くの検討を積み重ねることが重要ではないかと考えた。

そこで、本稿では、小学校教員養成課程の大学生が被服製作実習につい

て持つ苦手意識や技能の実態に着目しつつ、本学のカリキュラムの中で、小学校で教えるべき技能を獲得すること、被服製作実習をまずは大学生自身が楽しむことができるような指導方法、学習内容を検討し、今後の授業改善の一助とすることを目的とする。被服製作実習の中でも特に、手縫いの基礎的技能について検討する。

2 研究の方法

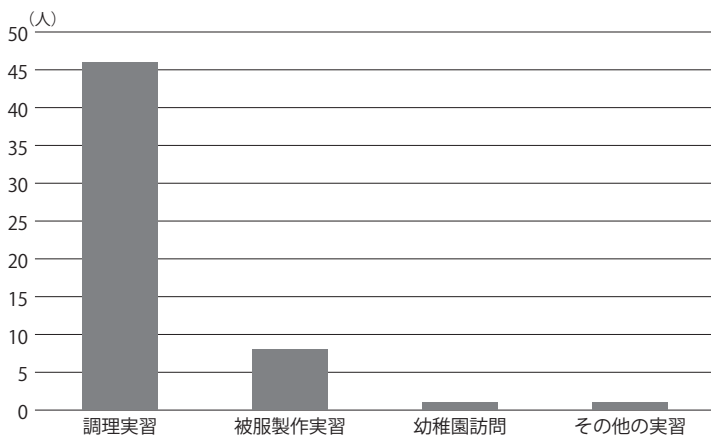
2016年度後期にH大学で開講された小学校教諭一種免許状取得のための必修科目「家庭科教育法」（2単位）において、全15回中、第9回目、第10回目（90分×2コマ）に、手縫いの基礎についての学習を実施した。事前に、授業の第1回目で家庭科のイメージについてのアンケートを、第8回目で被服製作実習についての意識、経験についてアンケートを実施した。第9回目、第10回目の手縫いの基礎についての学習では、小学校の教科書に掲載されている基礎的技能（針に糸を通す、玉結び、玉どめ、いろいろな縫い方、ボタンつけ）を用いたカードを入れを作成した。授業後には、学習の成果や意識の変化について事後アンケート調査を実施した。受講生（大学2年生62名〔2クラス分〕）を対象とした。

3 研究の結果

(1) 小・中・高校で学んだ家庭科についてのイメージ

「家庭科教育法」の第1回目の授業で、小・中・高校で学んだ家庭科のイメージをたずねた。小・中・高校で家庭科を学ぶ中で、特に「楽しかったこと」をたずねたところ、図表1のような結果になった。「調理実習」「被服製作実習」「幼稚園訪問」「その他の実習」と、いずれも“実習”があげられた。最も多くあげられたのは「調理実習」であった。「調理実習」が「楽しかった」理由としては、「おいしいものを作り、食べられるから」「友だちと協力して作り、みんなで食べたことが思い出に残っている」などがあげられた。

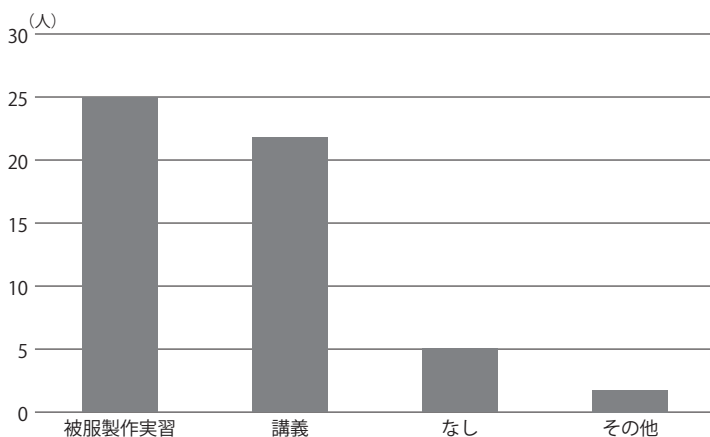
図表1 小・中・高校の家庭科で楽しかったこと



小・中・高校で家庭科を学ぶ中で「嫌だったこと」をたずね、自由記述で回答してもらったところ、「被服製作実習」をあげた者が出席者51名中25名と最も多かった（図表2）。具体的には、「裁縫」（16名）、「ミシン」（6名）、「エプロンづくり」（2名）「手縫い」（1名）があげられた。嫌だった理由としては、「不器用で、うまくできなかったから」「アイディアが思い浮かばなかったから」「期限までに終わらずに納得しないものを提出しなければいけなかったから」などがあげられた。自分の技能について、「苦手だ」「うまくできない」と認識するような経験をしたこと、デザインなどアイディアやセンスが必要とされる場合に難しく感じた経験があったこと、課題を授業内に終えることができず満足できない作品となり、達成感を味わう経験ができなかったこと、などが背景にあると思われる。

次に多かったのは「講義」（22名）であり、具体的な講義内容としては、たとえば、「栄養素」（7名）、「調理実習の計画」（2名）、「衣生活」（2名）があげられた。

図表2 小・中・高校の家庭科で嫌だったこと



(2) 小学生の頃から現在（大学生）までの被服製作経験について

第8回目の授業で事前アンケートを実施し、小学生の頃から現在（大学生）までの被服製作経験についてたずねた。

大学生になってからボタンつけをした経験についてたずねたところ、「ない」という回答が最も多く（53%）、次に2～4回（26%）、1回（16%）、5回以上（3%）であった。

これまでに手芸品店等で自分で布を買った経験についてたずねたところ、「ある」と答えた学生（46%）と、「ない」と答えた学生（53%）がおよそ半々であった。

小・中・高校の授業での市販の教材キットの使用についてたずねたところ、「いつもキットだった」が最も多く（55%）、次に「キットのときがあった」（44%）が多く、「キットを使ったことがない」と回答した者はいなかった。

これまでに被服製作実習をして楽しいと思ったことがあるかどうかたずねたところ、「ある」と回答した者が多く（75%）、「ない」と回答した者

(25%)は少なかった。楽しいと思ったことが「ある」と回答した者には、具体的にどのようなことが楽しかったのか自由記述で回答してもらった。最も多くあげられたのは、「完成していく達成感」(33%)であり、「うまく／きれいにできた」(16%)、「イメージどおりにできた」(5%)、「自分が好きなデザイン／縫い方でできた」(5%)などの回答がみられた。

これまでに被服製作実習をして嫌だと思ったことがあるかどうかたずねたところ、「ある」と回答した者が多く(66%)、「ない」と回答した者(32%)は少なかった。嫌だと思ったことが「ある」と回答した者には、具体的にどのようなことが嫌だったのかを自由記述で回答してもらった。最も多くあげられたのは「うまく／イメージどおり／思ったとおりにできない」(30%)であり、「針がささったとき／針が怖い」(10%)、「面倒」(7%)、「間違えたとき」(5%)、「細かい作業が多い」(5%)、「途中で飽きる」(5%)などの回答がみられた。

以上より、大学生は、日々の生活の中で、ボタンつけをするなど針と糸を使用する機会の少ないことが分かる。小・中・高校では被服製作実習の材料として教材キットが使われる場合も多く、自分で布を買いに行ったことがない、布がどのように売られているのかを見たことがないことが多い。そして、自分で材料を選ぶ楽しさ、材料どうしの組み合わせを考える楽しさを経験していない場合が多い。被服製作実習に対して「楽しい」と感じるのは、完成していく達成感を感じ、イメージどおりに、自分が好きなデザインや縫い方で作れたときであり、反対に「嫌だ」と感じるのは、うまくできないとき、思った通りにできないときが多いようであった。

(3) カード入れの製作

事前アンケートの結果をふまえ、授業内で、家庭に持ち帰ることなく全員が完成でき、小学校の教科書に掲載される基礎的技能の確認ができる題材として、「カード入れ」を考えた。大学生が通学の際に携帯している学生証を入れることができるサイズとした。基礎的技能として、玉結び、玉ど

め、なみぬい、ボタンつけの確認ができること、さらに、教科書には掲載されていないが、ボタンホールにはブランケットステッチを使うこととした¹³。ボタンホール以外は、製作にかかる時間を考えながら、並み縫いかブランケットステッチから各自選ぶよう伝えた。材料のフェルト（10cm×20cm）、ボタン（直径11mm）、糸は教員がまとめて準備した。材料どうしの組み合わせにより個性が出せるよう、フェルトは様々な色を購入し、配布時に学生に選んでもらった。ボタン、糸も数種類購入し、フェルトの色と様々な組み合わせができるようにした。

はじめに、玉結び、玉どめ、なみぬい、ボタンつけの方法を確認し、ブランケットステッチの説明（毛布の縁かがり、ボタンホールなどに使われる縫い方であること、縁かがりとして便利であること）をした。

配布資料に沿って作り方を説明した後、作業を開始した。カード入れの深さや蓋の形は自由にアレンジしてよいこととした。机間巡視をしながら基礎的技能の確認をしていき、習得が不十分な場合は個別に指導した。玉結びや玉どめが正しい方法でできていない場合があったが、個別に指導することで、全員ができるようになった。ブランケットステッチは初めての学生も多かったため、2～3人ずつ指導していった。また、机間巡視中、逆方向に縫う学生、糸がつれたまま縫い進める学生が多くみられたため、きれいに縫うためには縫う方向が大切であること、途中で糸こきをしながら縫い進めること、糸がねじれていたらもとに戻すこと、などを個別に伝えていった。学生同士、互いに教え合うよう促した。

早く完成した学生は、フェルトの切れ端を互いに交換し合って、できあがったカード入れにアプリケをつけたり、刺繍を刺したりした。

図表3 作品例



図表4 作品例

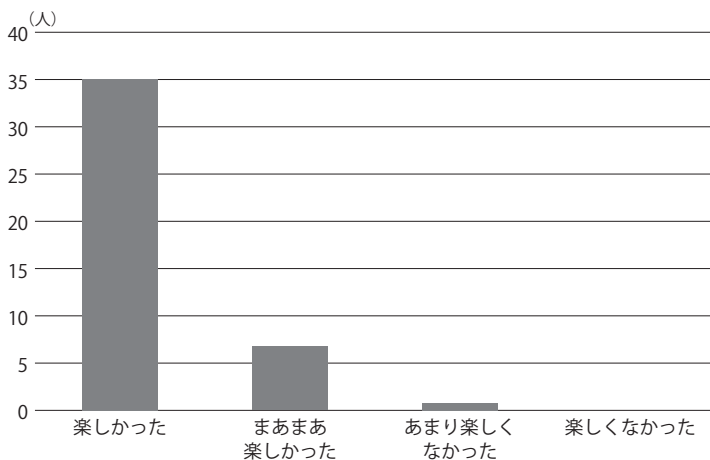


(4) カード入れの製作を通して

カード入れの製作をした後、事後アンケートを実施した。

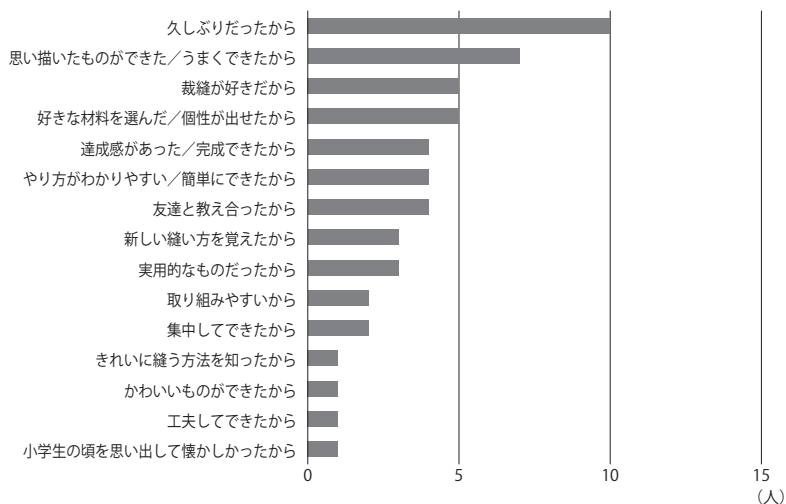
カード入れの製作が楽しかったかどうかをたずねたところ、「楽しかった」(83%)「まあまあ楽しかった」(13%)と、ポジティブな回答が多くみられた(図表5)。

図表5 カード入れを製作して楽しかったか



「楽しかった」理由をたずねると、「久しぶりだったから」（例：「大学生になると普段裁縫をしないので久々にやってみて楽しいと感じました」）、「思い描いたものができた」（例：「自分が思うカード入れを作ることができたから」）、「うまくできたから」（例：「意外とうまく縫うことができたから」「意外と裁縫の能力があったから」）、「裁縫が好きだから」「好きな材料を選んだ」（例：「自分で好きな布、ボタン、糸を選んで作れたから」）、「個性が出せたから」（例：「オリジナリティのある作品をそれぞれ作れるから」）、「達成感があった」（例：「出来上がっていくのがワクワクしたから」）、「完成できたから」（例：「細かいところまで教えてもらいながら一つの作品を完成させることができたから」）、「やり方が分かりやすい」「簡単にできたから」（例：「大変だと思わず楽しかった」）「友達と教え合ったから」、「新しい縫い方を覚えたから」、「実用的なものだったから」（例：「使えるものなので、作り甲斐があった」）「ただ作るだけでなく、実用品として使えるものを作ったから」などがあげられた（図表6）。

図表6 楽しかった理由



「あまり楽しくなかった」という回答も1人（2%）みられた。「細かい作業が苦手」という理由があげられた。

カード入れを製作して「よかった」と思うことがあるかどうかたずねたところ、次のような回答がみられた。

① 基礎的な技能の確認ができたこと：

「玉結び、玉どめが確実にできるようになった」

「ボタンつけが上手になった」

「なみぬいも忘れていたので、思い出せてよかった」

② 苦手意識が克服できたこと：

「縫うことに苦手意識があったが、楽しめた」

「裁縫に対して少し自信が持てるようになった」

③ 製作を楽しめたこと：

「簡単に楽しくできる」

「かわいいものができてよかった」

「自分のオリジナルが作れるのでいいと思う」

④ 新しい技能の習得、生活での活用：

「新しい縫い方を学び、アレンジする方法が増えてよかった」

「基礎的な縫い方から応用的な縫い方まで学べたところ」

「身近で使えるものを自分でつくることができたことがよかった」

「作った後に使えるものなのでゴミにならない点がよかったと思う」

カード入れの製作を終えて、小学校で家庭科を教えることに対して以前より自身が持てると思うかどうかをたずねたところ、「はい」（72%）が多かったが、「わからない」（25%）、「いいえ」（2%）という回答もみられた。

小学校の家庭科で被服製作実習を教えるにあたり、ボタンつけや手縫いの基礎以外に確認しておきたい技能があるかどうかたずねたところ、「ミシン」（62%）が最も多く、「なし」（30%）、「縫い方の種類や教え方」（2%）、

「指ぬきの使い方」(2%)、「まち針の正しい使い方」(2%)、「まっすぐ縫うための方法、教え方」(2%)という回答がみられた。ミシンについては、2016年度は使い方を講義するだけで、実習は実施していなかった。大学生の不安が多いことから、今後の課題としたい。

4 おわりに

本稿において、大学生が苦手意識を克服し、技能を確認し、被服製作実習を楽しむことができ、将来小学校で教える自信を持つことができるような指導方法と学習内容を検討した結果、次のことが明らかになった。

- (1) 事前アンケートの結果、大学生が日頃、生活の中で針と糸を使用する機会は少なかった。被服製作実習に対する苦手意識を持つ学生が多くみられた。苦手意識を持つ理由として、自身を「不器用」「うまくできない」と認識していたり、アイデアやセンスが求められる課題を難しく感じたり、期限に間に合わず達成感が得られなかった経験があげられていた。
- (2) 今回、教職の必修科目「家庭科教育法」において2回(90分×2コマ)分を被服製作実習(手縫いの基礎)の学習にあてた。事前調査の結果をふまえ、学生たちの達成感につながるよう、2回の授業で家庭に持ち帰らず全員が仕上げることができること、手縫いの基礎、ボタンつけの技能の確認ができること、材料の組み合わせや縫い方を選ぶことで個性を出せること、普段の生活で使えること、などを考慮し、「カード入れ」を製作した。製作にあたっては、技能の確認、新しい縫い方や、縫い方のコツを伝えるために机間巡視と個別の指導、そして学生同士の教え合いも重要であることが分かった。
- (3) 事後アンケートからは、全体的に学生たちの満足感が高く、「カード入れ」の製作について「楽しかった」、作って「よかった」という回答が多かった。作り方が分かりやすく、取り組みやすいこと、材料の組み合わせや縫い方を選ぶことで個性を出せること、教科書に出ていな

い新しい縫い方をできるようになったこと、普段の生活で使えるものが作れたことなどが、達成感や、「(苦手意識があったが) 意外とうまく縫うことができた」という自身の評価につながったようであった。「カード入れ」を作成して「よかった」ことについてたずねると、基礎的技術の確認ができたこと、苦手意識の克服、製作を自身が楽しめたこと、新たな技術の習得や生活への活用ができるようになったこと、などがあげられた。

毎年、大学生の実態は少しずつ異なることが予想されることから、それぞれの実態に応じて適切な学習内容や指導方法の検討を重ねていくこと、また、学生たちの不安が大きいミシンを用いた被服製作実習について、限られた時間の中で学習する方法を検討することについては今後の課題としたい。

注

- 1 永田晴子 2003年「女子大学生の家庭科イメージの変化」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第56巻 pp.263-284、藤田智子 2013年「大学生の「家庭科」に対するイメージにみる男女共修家庭科の意義と課題」『名古屋女子大学紀要(家政・自然編)』第59号 pp.1-12、室雅子 2014年「教員養成課程における大学生の家庭科観からみる家庭科教育の課題」『椋山女学園大学研究論集(社会科学篇)』第45号 pp.239-249など
- 2 中間美砂子 1998年「子どもに託す生活の未来—家庭科教育—」日本家政学会編『日本人の生活—50年の軌跡と21世紀への展望—』建帛社 pp.268-272、柳昌子 2000年「家庭科教育と地域社会—子ども・地域の変化とかわる家庭科」(日本家庭科教育学会編『家庭科教育50年 新たなる軌跡に向けて』建帛社 p.213)、日本家庭科教育学会編 2004年『家庭科で育つ子どもたちの力』明治図書 など
- 3 赤崎眞弓 1996年「被服製作基礎技能に対する学生の自己評価と被服実習授業の検討」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』第26号 pp.111-122、布施谷節子 高部啓子 2001年「家政系女子短大生における手縫いの技能の実態：被服製作の知識と過去の経験との関連性」『日本家庭科教育学会誌』第43巻第4号 pp.273-278、小林久美、柳昌子 2007年「小学校教員養成科目としての家庭科の課題(1)—基礎技能に関する調査を通して—」『九州女子大学紀要』第44巻1号 pp.29-45、小林久美、柳昌子 2008年「小学校教員養成科目としての家庭科の課題(2)—衣の技能に関する実技調査を通して—」『九州女子大

小学校教員養成課程における家庭科の指導方法・学習内容についての一考察

- 学紀要』第44巻3号 pp.17-29、速水多佳子、黒光貴峰 2014年「大学生の家庭科における調理、被服製作の知識・技能の習得状況にみる課題」『日本家庭科教育学会誌』第57巻1号 pp.14-21 など
- 4 池崎喜美恵 2000年「小学校の家庭科教科書」前掲書『家庭科教育50年 新たなる軌跡に向けて』pp.63-70、朴木佳緒留、鈴木敏子 1991年『資料からみる戦後家庭科のあゆみ』学術図書、拙稿 2008年「1950年代における高等学校学科家庭科の被服教育」『中等教育史研究』第15号 pp.17-34 など
- 5 文部科学省 2008年『小学校学習指導要領』
- 6 牧野カツコ他 2009年「座談会 これからの生活とライフスキル」牧野カツコ編 お茶の水女子大学附属学校家庭科研究会著『家庭科の底力：作る手が子どもたちを輝かす—家庭科が育てるミニмум エッセンシャル・ライフスキル』地域教材社 pp.126-135
- 7 本学では、2016年度現在、教職に関する科目のうち、家庭科に関する必修科目は「家庭科教育法」（2単位）のみであり、多くの学生が履修する選択必修科目の「家庭科概説Ⅰ」（2単位）、選択科目を含めても家庭科の単位数、また、その中で被服製作実習の時間数は限定されている。全国的に同様の傾向が予想されることが指摘されている（赤崎 1996年：注3参照）。
- 8 前掲書、『小学校学習指導要領』
- 9 鈴木明子 2009年「家庭科における「布を用いた製作」の教育的意義の検討—体験としての意義と基礎的・基本的技能習得との関係を中心に—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』第58号 pp.301-307、鈴木明子 2011年「家庭科教育における「布を用いた製作」に関する一考察—フィンランドの「クラフト科」教育との比較から—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』第60号 pp.265-274、鈴木明子 2015年「家庭科における布を用いた製作の教育的意義の再考—製作学習への意識とフィンランドのクラフト教育からみた課題—」『日本家政学会誌』第66巻第11号 pp.588-593 など
- 10 近藤清華 2013年「小学校教員養成科目としての家庭科の現状と課題—短期大学のシラバス分析から—」『川口短大紀要』27号 pp.185-194
- 11 前掲書、『小学校学習指導要領』
- 12 高森寿、片山喜美子 1988年「小学校「家庭科」被服製作を指導する能力の育成」『熊本大学教育学部紀要 人文科学』第37号 pp.173-181、永田智子、藤原容子、潮田ひとみ 2015年「ミシン使用の技能と指導の自信を高める初等教員養成課程『初等家庭科教育法』の工夫」日本家庭科教育学会第58回大会 研究発表要旨集、永田智子、藤原容子、山本亜美、潮田ひとみ 2016年「ミシン縫いと手縫いの技能及び指導の自信を高める初等教員養成課程『初等家庭科教育法』の授業デザイン」日本家庭科教育学会 第59回大会 ポスター発表要旨集
- 13 流田直、馬場由子 2009年「作って楽しむ生活者のスキル①」（前掲書、『家庭科の底力：作る手が子どもたちを輝かす—家庭科育てるミニмум エッセンシャル・ライフスキル—』pp.46-49）を参考にした。